

論文内容要旨

論文題名 口蓋裂初回手術後から成人期までの長期経過観察
—唇顎口蓋裂 40 例の言語成績—

掲載雑誌名 日本口蓋裂学会雑誌 第 41 巻 第 1 号 8-16 頁 2016 年

外科系形成外科学専攻 木村智江

内容要旨

目的：Pushback 法による初回口蓋裂手術を 1 歳代で施行した症例の幼児期の言語成績は、鼻咽腔閉鎖機能(以下 VPC)良好が 80%以上、正常構音が 50%以上との報告が多い。しかし、成人期の最終的な言語成績は不明である。そこで本研究では、成人期までの音声言語(VPC と構音)の長期経過と最終的な言語成績を明らかにし、今後の言語治療の改善に役立てるために後方視的検討を行った。

方法：対象は唇顎口蓋裂 40 例(男 21 例/女 19 例)で、裂型の内訳は片側唇顎口蓋裂が 30 例、両側唇顎口蓋裂が 10 例であった。全例が 1978～1995 年の期間に 1 歳代で pushback 法による口蓋裂手術を受けた。手術は昭和大学形成外科の複数の術者が施行した。

音声言語の聴覚判定は口蓋裂言語を専門とする言語聴覚士 3 名が行った。VPC は口蓋裂言語検査(日本コミュニケーション障害学会、2007)に基づいて開鼻声と呼気鼻漏出による子音の歪みを 4 段階で評価した。VPC「良好」は聴覚判定がいずれも段階 0「なし」の場合である。VPC「ごく軽度不全」は、日常会話に支障がない実用的な VPC と見なした。機器による精査を行った症例ではそれらの結果も合わせて重症度を判定した。構音障害の有無と種類は構音検査法に基づいて判定した。構音障害は、特異な構音操作による誤りとその他に分類した。

音声言語の評価時年齢は、幼児期(3～5 歳)、学童前期(6～7 歳)、学童後期(9～12 歳)、青少年期(13～18 歳)、成人期(19 歳以上)の 5 期である。結果：40 例全体の結果は以下のとおりである。

1. VPC 良好例は幼児期 27 例(67.5%)から成人期 19 例(47.5%)に減少し、ごく軽度不全例が 6 例(15.0%)から 18 例(45.0%)に増加した。成人期はこれらを合わせて 37 例(92.5%)が実用的な VPC を獲得した。
2. 学童前期から成人期にかけて、VPC の変化を 31 例(77.5%)に認め、悪化例は学童後期から青少年期、改善例は学童前期と成人期に多かった。

3. 正常構音は幼児期 18 例 (45. 0%) であり、学童前期以降 9 例に構音障害が出現したが、成人期は全例正常構音であった。
4. 構音障害の 22 例中 21 例 (95. 5%) は幼児期から構音訓練を受け、学童後期から成人期にかけて構音障害の半数が消失した。
5. 構音障害は口蓋化構音が最も多く幼児期に 11 例あり、成人期は 6 例に残存した。
6. 成人期正常構音は 28 例 (70. 0%) であった。

考察：成人期の VPC を幼児期の音声言語の判定のみで予測することはできない。今回の結果から、幼児期の判定に関わらず音声言語の再評価を 10 歳、16 歳、治療が終了する 20 歳頃に行うことが望ましいと考える。

構音障害については、構音訓練を終了した後も成人期まで長期にわたり改善する可能性があり、ST が経過観察と指導を継続することは有用である。